

## 大木啓次先生記念号によせて

大木啓次先生は、1964年に本学経済学部助手として就任されて以来、本年3月定年退職されるまで、31年の長きにわたって、本学ならびに経済学部発展のために尽くされ、学問の府として本学の名声を高めるべく努力されました。先生は、経済学部で「価値論」および必修科目である「経済原論」の講義を担当され、他学部も含む学生の教育に当たられる一方、ゼミナール、大学院での研究指導を通じて、研究者の育成にも努められました。

先生は、研究の出発点をマルクス価値論におかれしました。これは、先生が研究を開始された戦後の社会状況や経済学のあり方に規定されたことであつたと思われまふ。処女論文「資本制下における価値法則」(1953年)、また「資本主義の基本的経済法則とその歴史的発展」(1955年)に始まる価値実体、社会的必要労働時間についての論文は、価値の実体を規定するものはなにか、その大きさを規定するものはなにかという価値論の根本問題を『資本論』にそくして詳しく検討し、マルクス価値論の特徴を浮き彫りにした研究でした。

その後先生は、家事労働や婦人問題についても、マルクス価値論との関連において研究を進められました。それらは主にエンゲルスやレーニンに依拠しつつ、女性労働の解放を、私的個人労働の社会的労働への転化として展望したものでした。しかし1980年代のはじめ、先生の研究関心は社会主義に向きました。「ソ連邦に共産主義社会は建設されたか？」(1982年)や「ソ連邦に社会主義社会は建設されたか？」(1985年)等は、東欧社会主義に見られる諸問題の一層の顕在化がその執筆契機であつたと思われまふ。社会主義の成立が宣言されているにもかかわらず、そこに見られた商品生産の拡大、社会的不平等の拡大、特権階級の出現という現状をマルクス理論に照らして批判しようとしたものでした。しかし、その後も先生は研究を進められ、既存の社会主義を生み出す理論的支柱であつたマルクス理論それ自体に問題があるという見解に達し、その全面的な再検討を企図されました。その結果、価値実体や剰余価値論の論証が全く成り立たないということを主張されました。先生のそうした所説は『マルクス経済学を見直す』(1994年)としてまとめられました。

マルクス経済学の否定に等しく、また御自身の従来の理論的立場の再検討にもつながるこのような先生の主張に対しては、様々な意見が寄せられています。しかし先生の主張は、現代社会の投げかけた問題に答えようとしたものであり、理論的に大きく方向転換されたとはいえ現実の諸矛盾の解決に立ち向かおうとする、研究の出発点において先生が自らに課せられた人間的な姿勢の、あり得べき帰結であつたかもしれません。

先生はまた、経済理論学会等の学会においても積極的に活動をされ、本学の権威を高めるこ

とに努力してられました。

立教大学は、先生の長年にわたる功績に敬意を表して、1995年6月、先生に名誉教授の称号を贈りました。

先生はいま定年退職の時期を迎えられましたが、経済学部的发展に尽くしてられました先生のご功績を永くとどめるために、本号を先生の記念号といたします。先生の今後のご健康とご活躍を祈念すると同時に、これまでと変わらぬご助力を本学と経済学部のために賜りますようお願いしてやみません。

1995年11月

経済学部長 服部正治